

近代エジプト学の成立と所蔵品の帰趨 —ベルリン・エジプト博物館をめぐる—

森 貴史*

Establishment of Modern Egyptology and Acquisition of Collections:
Neues Museum in Berlin

Takashi MORI*

[Abstract]

The Neues Museum on Berlin's Museum Island, a UNESCO World Heritage site, reopened in September 2009 after being closed for seventy years. The centerpiece of the museum's collection is the bust of Queen Nefertiti of the Egyptian Museum, which is a controversial piece with the Egyptian government repeatedly demanding its return since the early twentieth century. The discovery of the Rosetta Stone during Napoleon Bonaparte's Egyptian campaign and Jean-Francois Champollion's success in deciphering the hieroglyphics ushered in the rise of modern Egyptology in Europe. Germany has played a leading role in the establishment of Egyptology. German Egyptology was founded by Karl Richard Lepsius, and the Egyptian Museum of Berlin significantly contributed to the promotion of Egyptology. The museum still houses the Troy collection donated by Heinrich Schliemann, but most of the collection was seized by the former Soviet Union during World War II. The bust of Nefertiti was excavated in Tell el-Amarna in December 1912 thanks to a benefactor James Simon and an Egyptologist Ludwig Borchardt, and it was obtained by Germany under the partage system. Egypt deems the procedures of partage themselves invalid, and thus has requested the repatriation of the bust. Ownership of ancient artwork is still a subject of dispute not only at the Egyptian Museum of Berlin but also between prominent museums in Europe and the countries where the artworks were unearthed. Of the antiquities the Egyptian Museum of Berlin acquired in the eighteenth and nineteenth centuries, many were obtained via ways that the museum officials would rather not reveal. Returning artifacts to their countries of origin, however, does not offer an instant solution to the problem in terms of preservation and exhibition. More time and further discussion will be needed.

1 ノイエス・ムゼウムに帰趨する

2009年9月、ベルリンの「博物館の島」(Museumsinsel)にあるノイエス・ムゼウム (Neues Museum、新博物館) はふたたび開館した (Fig. 1)。再建工事は2003年から開始されていたものの、70

* 関西大学文学部 (Faculty of Letters, Kansai University, Japan)



Fig. 1 博物館の島のノイエス・ムゼウム
(http://de.wikipedia.org/wiki/Neues_Museum_%28Berlin%29)

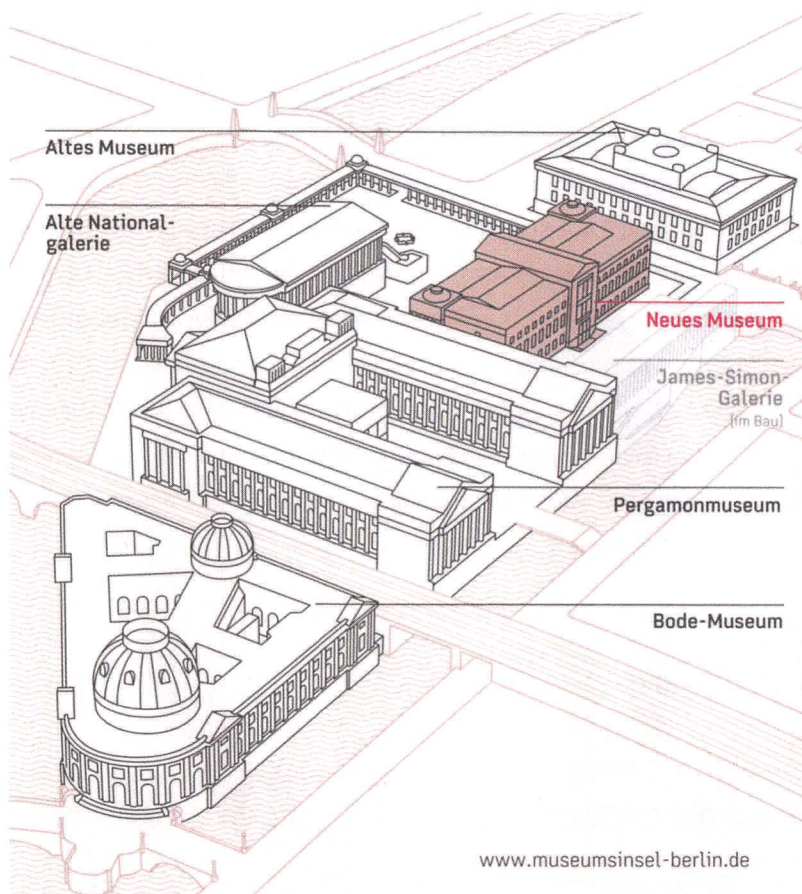


Fig. 2 「博物館の島」の俯瞰図
(www.museumsinsel-berlin.de)

年におよぶ閉鎖期間があったのちのことだ¹。閉鎖していた原因は、第2次世界大戦で首都ベルリンが戦場となったさいに、建物の損傷が激しかったからである。周辺地域は旧東ドイツに帰属しており、いわば放置されてきた状態であったのだが、1990年のドイツ再統一を機に、「博物館の島」一帯の復興がなされるようになった。

ベルリン・ミッテ地区のシュプレー川とクプファーグラベン (Kupfergraben) のあいだに位置する「博物館の島」には、壮麗な建築物からなる5つの博物館・美術館が林立している (Fig. 2)。アルテス・ムゼウム (Altes Museum)、アルテ・ナツィオナルガレリー (Alte Nationalgalerie)、ボーデ博物館 (Bode-Museum)、ペルガモン博物館 (Pergamonmuseum)、そしてノイエス・ムゼウムである。

それぞれを少しだけ解説しておく、1830年に開館したアルテス・ムゼウム (旧博物館) は現在、改築中である。2015年完成予定で、ギリシア・ローマ美術コレクションを収蔵している。アルテ・ナツィオナルガレリー (旧国立美術館) は1876年に開館されて、収蔵コレクションはヨーロッパ近代美術である。1904年開館のボーデ博物館は2006年にリニューアルされた。古代コイン・コレクション、彫刻コレクション、ビザンチン博物館と絵画館のコレクションを所蔵する。ペルガモン博物館は1930年開館の歴史を有するが、増改築中で2015年完成予定である。古代西アジア博物館、ギリシア・ローマ美術コレクション、イスラム博物館のコレクションが収蔵されている²。これら5館のほかに、第6番目の博物館ジェームズ・ジモン・ガレリー (James-Simon-Galerie) が現在、建設中であるが、この建物については後述する。

ドイツ再統一後に段階を追ってなされてきた復興の成果あって、シュプレー川の中州にある「博物館の島」は、1999年には世界文化遺産に指定されるまでにいたった。とりわけ、本稿でとりあげるエジプト博物館は、パピルスコレクションとともに、このノイエス・ムゼウムの展示スペースを先史古代史博物館 (Museum für Vor- und Frühgeschichte) と二分している³。数ある展示品のなかでも、ドイツ語では「ノフレテーテ」 (Nofretete) と表記されるネフェルティティの胸像こそは、ベルリンの「博物館の島」にあるノイエス・ムゼウムの至宝のひとつとされるエジプトの出土品であって⁴、ベルリンのエジプト博物館のシンボルアイコンともいべき所蔵品である (Fig. 3)。

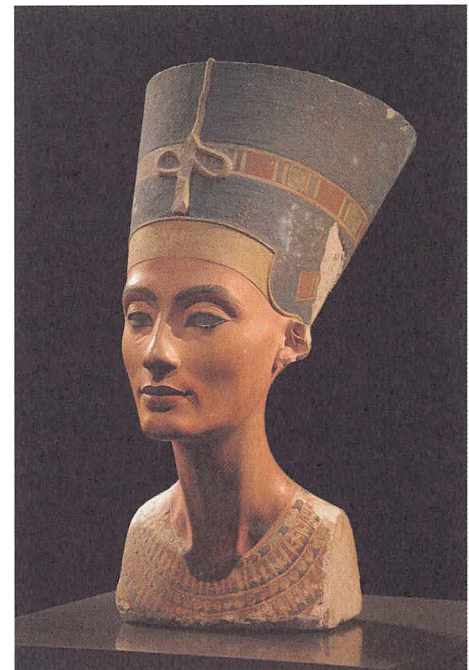


Fig. 3 ネフェルティティの胸像
(<http://de.wikipedia.org/wiki/Nofretete>)

1 Vgl. Adrian von Buttlar: *Neues Museum Berlin. Architekturführer*. Berlin, München: Staatliche Museen zu Berlin, Deutscher Kunstverlag 2010, S. 7 f.

2 ペーター＝クラウス・シュスター (松井隆夫訳)、「ベルリン博物館島の奇跡」、東京国立博物館、朝日新聞社 (編)、『世界遺産・博物館島 ベルリンの至宝展 よみがえる美の聖域』、東京国立博物館ほか、2005年所収、21-28頁、21頁参照。

3 本稿でとりあげるベルリンのエジプト博物館 Ägyptisches Museum (Berlin) が帰属するノイエス・ムゼウムの住所は、以下のとおり。Neues Museum, Staatliche Museen zu Berlin, Museumsinsel, Bodestraße 1-3, 10178 Berlin

4 たとえば、『地球の歩き方』でも、ノイエス・ムゼウムの所蔵品として唯一、写真が掲載されている。『地球の歩き方 A14 ドイツ 2014～2015年版』、ダイヤモンド・ビッグ社、2014年、307頁参照。

ところが、古代エジプト王妃ネフェルティティの胸像をめぐるのは、ベルリンのエジプト博物館で公開された翌年の1925年にエジプトは胸像の返還を要求したり、1929年にはほかの重要文化財との交換をもちかけ、ナチス時代の1933年にも返還要求をおこなっていたりと⁵、じつはいわくつきの〈お宝〉なのである。

最近では、2011年1月24日付の時事通信の報道によると、エジプト考古最高評議会が、ドイツのベルリンにある新博物館の監督当局に、ネフェルティティの胸像の返還を要請する文書を送ったと発表したという⁶。それからさかのぼることほぼ2年前の2009年12月20日に、エジプト考古最高評議会が同一の胸像の返還を正式にドイツに対して要求するという方針を明らかにしたという報道がすでになされていた⁷。

この胸像の所有権がエジプトとドイツのどちらにあるのかという問題は、そもそも最初に発掘されたさいに、すでに火種となる要因を胚胎していた。これは本稿のメインテーマのひとつであるゆえにのちに詳述するが、同様の問題は古美術を所蔵する先進国の博物館の多くが共有しているといっただろう。

ベルリンのエジプト博物館の現状と歴史を紹介することは本稿の目的のひとつであるが、もうひとつの目的はその博物館の歴史をひもときながら、ネフェルティティの胸像をとりまく問題について考察することだ。ヨーロッパと中東の国家間の政治関係と歴史的経過とならんで、文化財の発見者と出土国をめぐる所有権・保存能力といった複雑な問題が、胸部しかないあの古代エジプト王女の彫像と、そのみえない半身部分をあつらえたごとく不可分に融合しているといえるだろう。そして、この解決がきわめて困難なテーマを考察することは、関西大学CHC文化グループの研究領域に属するものとして一定の意義を有していると思われる。

2 ドイツ近代エジプト学誕生の前史

ナポレオン・ボナパルトがその野心と同等のなみならぬ知的好奇心をもっていなければ、近代的なエジプト考古学やエジプト学は19世紀のヨーロッパで生起しなかつただろう。1798年から開始されたナポレオンのエジプト遠征に従った人数には38,000人の軍人、調理と洗濯担当の女性300人のほかに、画家、技術者、地理学者、植物学者、数学者、歴史学者などの学者167人が同行していたからである⁸。1760年代から遂行されたフランス海軍ルイ＝アントワーヌ・ブーガンヴィルやイギリス海軍ジェームズ・クックによる南太平洋をめぐる探検航海にも、画家や博物学者がデータ収集のために随行していたが⁹、ナポレオンのエジプト遠征は、この方法論をさらに大規模に組織化したものだといえよう。

1799年7月15日、アレクサンドリアから64キロの距離に位置する港町ロゼッタの要塞でフランス兵たちが掘削していたさいに、古代ギリシア文字、古代エジプトの神聖文字ヒエログリフ、民衆文字デモティックという3種の言語が刻まれた石碑が発見される (Fig. 4)。のちにロゼッタ・ストーンと呼ばれることになるその石碑には、プトレマイオス5世治下の法律が3種類の言語で書かれていたのである¹⁰。だが、約2週

5 シャロン・ワックスマン (櫻井英里子訳)、『奪われた古代の宝をめぐる争い』、PHP 研究所、2011年、87-88頁参照。アメリカ人ジャーナリストによるこの著作から、オリエントや地中海沿岸諸国で発掘された古代美術品を所蔵する欧米の博物館が抱える問題に関して、大いに示唆を受け、参照したことを記しておきたい。

6 2011年1月24日付 Yahoo! ニュース、<http://news.yahoo.co.jp/pickup/3451616> 参照。

7 2009年12月21日付 AFPBB News、<http://www.afpbb.com/articles/-/2677093> 参照。

8 ワックスマン、2011年、56-57頁参照。

9 たとえば、エティエンヌ・タイユミット、増田義郎 (監修)、『太平洋探検史 幻の大陸を求めて』、創元社、1993年、63-106ページ参照。

10 ワックスマン、2011年、52-53頁参照。

間後の8月1日に、フランス軍はイギリス海軍ホレーショ・ネルソンとの海戦に敗れて、ナポレオン自身はかろうじてフランス本国へ帰還した（その後1年間、フランス遠征軍は進軍を継続したが、1801年にイギリス軍に降伏したさいに、ロゼッタ・ストーンをふくむ発掘品はイギリス軍に接收された¹¹⁾）。

ナポレオンの遠征に同行した学者たちによるエジプトの古代文化や地理などの調査結果は、全23巻にも達する大判本の『エジプト誌』としてフランス政府発行で出版された。のちにルーヴル美術館初代館長になったドミニク・ヴィヴァン・ドゥノンも、ナポレオン遠征に同行した学者のひとりである。彫刻家、画家、考古学者であったかれは1802年に『ボナパルト將軍麾下の上下エジプト紀行』2巻を上梓する。この著作は英語とドイツ語にも翻訳されて、40版まで数えるほどのベストセラーになった¹²⁾。ヨーロッパにおけるエジプト・ブームがすでに始まっていたのである。

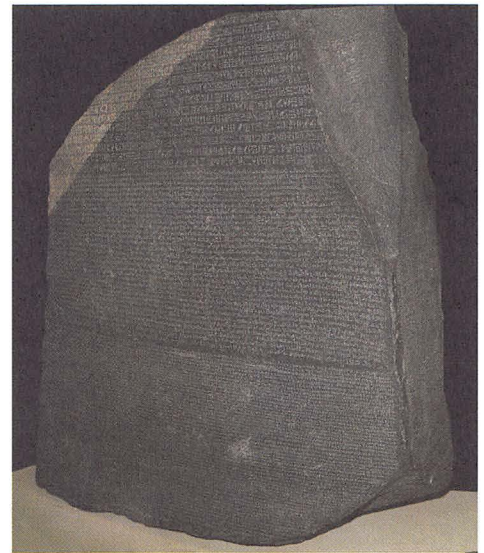


Fig. 4 大英博物館所蔵のロゼッタ・ストーン
(http://de.wikipedia.org/wiki/Stein_von_Rosette)

そして、1822年にジャン＝フランソワ・シャンポリオンによるヒエログリフ解読が成功する。古代エジプトの神聖文字が表意文字にして表音文字であることを発見したのだ。これによって、ロゼッタ・ストーンに彫られていた謎の文字の解明は、ヨーロッパ全土にセンセーションをもたらして、エジプト・ブームを決定的にした結果、西欧諸国にエジプト考古学やエジプト学の講座や研究所が設置された。とはいえ、古代エジプトをめぐるこうしたアカデミズムの隆盛が結果的に、エジプト各地での遺跡・遺品の発掘（あるいは盗掘）、さらにはヨーロッパへの流出を促進させてしまうのだが。

3 ドイツ・エジプト学の誕生

ベルリンのエジプト博物館も、やはりナポレオンのエジプト遠征に端を発した19世紀のエジプト・ブームの一環として構想された。最初に基礎となった収蔵品は、プロイセン王フリードリヒ・ヴィルヘルム3世の芸術コレクションにあったエジプトの古美術品である。それらのエジプト関係の収蔵品のみが博物学者アレクサンダー・フォン・フンボルトの進言で別置されたことに由来している。これに、イタリア人美術商のジュゼッペ・パッサラクア（Giuseppe Passalacqua, 1797-1865）から大量に購入したエジプトの発掘品とパピルスコレクションをくわえることによって、ベルリンのエジプトコレクションの基礎が形成された¹³⁾。さらには、エジプト学者レプジウスのエジプト探検によってもたらされた発掘品がその収蔵数を大幅に増大させるにいたるのだ。

収蔵品が増大していく過程にあったベルリンのエジプト博物館は、じつはドイツにおける近代エジプト学の成立と密接な関係をもっている。ここで、ドイツ近代エジプト学創始者といわれるカール・リヒャルト・

11 ワックスマン、2011年、62-63頁参照。

12 ワックスマン、2011年、61-63頁参照。

13 Vgl. http://de.wikipedia.org/wiki/%C3%84gyptisches_Museum_Berlin.

レプジウス (Karl Richard Lepsius, 1810-84) の事績をたどっておこう¹⁴ (Fig. 5)。

後年、「ドイツ・エジプト学の創始者」と呼ばれることになるレプジウスは最初、シャンポリオンのヒエログリフ解読を修正・補完した業績によって、頭角をあらわした。1842年には、プロイセンによるエジプト探検隊の指導者として、3年間におよぶ現地発掘調査を遂行し、その成果は12巻を数える大部の旅行記にまとめられている。つまり、レプジウス主導によるこの事業は、ナポレオンの「エジプト遠征」と研究報告『エジプト誌』公刊に匹敵するものであって、そのドイツモデルといえるだろうか。この功あって、レプジウスは1846年にベルリン大学エジプト学教授に任命された。

エジプトからの膨大な発掘品は当時、1850年に開館したばかりのノイエス・ムゼウム内のエジプト博物館に収蔵されたのだが、そのさい、レプジウスの構想にもとづいて展示されている。1855年からはエジプト博物館の共同館長にもなっており、ローマ考古学研究所、ベルリン王立図書館館長を歴任したのち、1866年に2度目の、1869年には3度目のエジプト探検に従事した。

シャンポリオンのヒエログリフ解読の修正・補完をなしとげたレプジウスがベルリンのエジプト博物館に対して果たした役割はこのうえなく大きい。みずからがエジプト調査旅行におもむき、現地の遺跡発掘、古美術品の収集をおこない、それらをベルリンの博物館に収蔵させて、分類と展示の方法まで指示しているのである。ベルリン大学でエジプト学の教鞭をとったレプジウスはまさしく、ドイツ・エジプト学の祖とされるのにふさわしいだろう。かれの多大な寄与によって、近代エジプト学がドイツで誕生し、エジプト博物館の権威が高められたことはまちがいない。レプジウスのおかげで、ベルリンはエジプト学の特別な地位をドイツ国内で確立できたのである。

4 シュリーマンのトロヤコレクション

このノイエス・ムゼウムには、日本でもっとも知られているドイツ人のひとりだと思われる人物のコレクションも所蔵されている。ハインリヒ・シュリーマン (Heinrich Schliemann, 1822-90) のミケーネ・トロヤコレクションである (Fig. 6)。ミケーネの遺跡を発掘したいと

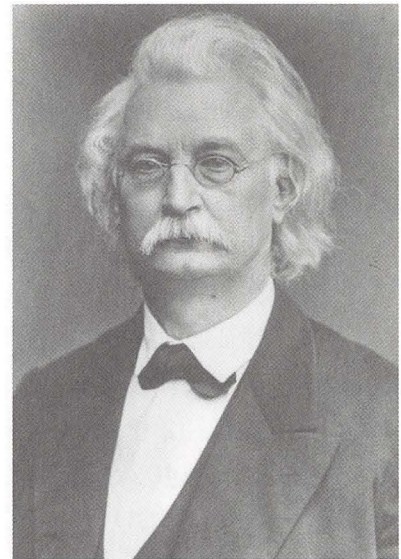


Fig. 5 カール・リヒャルト・レプジウス
(http://de.wikipedia.org/wiki/Karl_Richard_Lepsius)

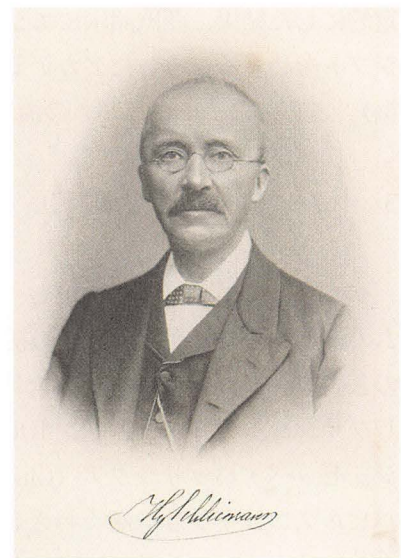


Fig. 6 ハインリヒ・シュリーマン
(http://de.wikipedia.org/wiki/Heinrich_Schliemann)

14 本稿におけるレプジウスの事績については、以下の文献に依拠した。Lepsius, Karl Richard. In: Walter Killy, Rudolf Vierhaus (Hrsg.): *Deutsche biographische Enzyklopädie*. München: Saur 1997, Bd. 6, S. 337. Jürgen Settgaß: Lepsius, Karl Richard. In: die Historische Kommission bei der Bayerischen Akademie der Wissenschaften (Hrsg.): *Neue Deutsche Biographie*. Berlin: Duncker & Humblot 1985, Bd. 14, S. 308 f.

いう少年期の夢を実現した異能の才人の伝記は、日本でも普及している¹⁵。

死にさいして、シュリーマンはベルリン大学病理学教授、病理学研究所所長であったルドルフ・ヴィルヒョー (Rudolf Virchow, 1821-1902)¹⁶を仲介役に、10,000点もの発掘品をドイツ国民に寄贈した(Fig. 7)。ヴィルヒョーはベルリン人類学・民俗学・先史学会 (Berliner Gesellschaft für Anthropologie, Ethnologie und Urgeschichte) を1869年に設立しており、かれをつうじて、シュリーマンの発掘品はベルリンの「王立民俗学博物館先史時代部門」の所蔵となった¹⁷。

ところが、もとの所有者がそうであったように、その発掘品にも数奇な運命が待っていた。というのも、シュリーマン由来の発掘品の一部は現在もノイエス・ムゼウムに所蔵されており、「赤のホール」 (Der Rote Saal) で展示されている¹⁸。しかしながら、第2次世界大戦で破損したほか、貴重な収蔵品の大部分は戦利品として旧ソ連軍によって旧ソビエト連邦へともち去られており、いまだロシア国内に留置されたままである¹⁹。シュリーマンが少年時代の夢を実現するエピソードは日本でも有名であるが、かれの発掘品のその後はあまり知られていないのではないだろうか。

シュリーマンの発掘品が返還されない理由は、ネフェルティティの胸像の所有権をめぐる問題とおなじく、じつはきわめて政治的な問題であるのだが、次章以降ではその複雑さの糸口を発見することを試みたい。



Fig. 7 ルドルフ・ヴィルヒョー
(http://de.wikipedia.org/wiki/Rudolf_Virchow)



Fig. 8 ジェームズ・ジーモン
(http://de.wikipedia.org/wiki/James_Simon)

15 たとえば、入手しやすいものとして、『古代への情熱 シュリーマン自伝』は、村田数之亮訳の岩波文庫版が1976年、関楠生訳の新潮文庫版が1977年に出版されている。しかし近年、シュリーマンの伝記内容の真偽については疑問が呈されている。たとえば、デイヴォッド・トレイル (須藤芳幸ほか訳)、『シュリーマン 黄金と偽りのトロイ』、青木書店、1999年、とりわけ20-21、429-430頁参照。

16 病理学者ヴィルヒョーの後半生は文化人類学を研究対象としたが、1874年には、シュリーマンは自身がヒルルサクで発掘した顔つき甕についての意見をヴィルヒョーに求めている。これ以降も、両者の交流は続いた。1879年にはギリシアと小アジアへつれだつて旅行し、ヒルルサク発掘に同行したり、1888年にはエジプトと再度のギリシアへ旅行している。Vgl. Heinrich Schipperges: Virchow, Rudolf (Ludwig Carl). In: Walter Killy, Rudolf Vierhaus (Hrsg.): *Deutsche biographische Enzyklopädie*. München: Saur 1999, Bd. 10, S. 213-214, hier S. 213. 大村幸弘、『トロイアの真実』、山川出版社、2014年、160-161頁参照。

17 Vgl. Friederike Seyfried, Matthias Wemhoff (Hrsg.): *Neues Museum Berlin. Ägyptisches Museum und Papyrussammlung. Museum für Vor- und Frühgeschichte*. München: Prestel Verlag 2009, S. 86 f.

18 Vgl. a. a. O. S. 118 f.

19 Vgl. a. a. O., S. 87.

5 ネフェルティティ胸像の発掘と寄贈

本稿冒頭で前述したとおり、女王ネフェルティティの胸像そのものはベルリン・エジプト博物館の展示物のなかでは非常に有名である。ところが、この女王自身については、紀元前14世紀中盤のエジプト王アクエンアテン（アメンホテプ4世）の正妃であったこと以外、多くは仮説の域を出ないのが現状である²⁰。

このネフェルティティの胸像発掘と関連が深いのは、ユダヤ商人ジェームズ・ジーモン（James Simon, 1851-1932）である（Fig. 8）。かれこそがあの胸像をベルリンの国立博物館へ寄贈した人物であるからだ。コットン製造をなりわいとするジーモンはいわゆる芸術パトロンであったが、19世紀末から20世紀序盤にかけて、エジプト博物館のみならず、ベルリンの博物館全体の美術品コレクションの拡充に大きく貢献した²¹。現在、「博物館の島」にて建設中で2017年に開館予定としているジェームズ・ジーモン・ギャラリーは文字どおり、かれの名を冠している。この6番目の建物は、「博物館の島」の入口として5館の博物館を連結する役割をになう博物館になる²²。

20世紀初期、ジーモンはベルリンで特異な地位を築いていた。1911年の記録によると、ベルリンの高額所得者リストで第6位を獲得するコットン工場の経営者であった²³。また、「皇帝のユダヤ人」(Kaiserjude)と呼ばれるほど、ドイツ皇帝ヴィルヘルム2世と近い友人関係を築く一方で、さまざまな博物館の委員会に任命されるほどの目利きと、皇帝のコレクション管理者や学者との密接な人間関係を有効利用して、ほとんどすべてのベルリンの美術コレクションにシステムティックな助成をおこなった。

とりわけ、キリスト教の彫像コレクションや絵画館の管理者であったヴィルヘルム・ボーデや、のちには美術史家マックス・J・フリートレンダーを顧問に迎えて、1880年代前半から開始した芸術品蒐集は広範囲におよんだ。1904年には、価値の高いルネサンス美術コレクションをカイザー・ヴィルヘルム博物館（現：ボーデ博物館）へと寄贈している。

ジーモンは芸術品を購入するばかりではなく、オリエントでの探検・美術品発掘についても支援した。ジーモンの個人的な尽力がなければ、ペルガモン博物館に現在、収蔵されているバビロンのイシュタル門もベルリンにはなかっただろうとさえいわれている。1911年から1914年におけるエジプトのテル・エル・アマルナの発掘もジーモンの支援によるものだが、ネフェルティティの胸像は1912年にそこで発見された。そして、この胸像もまた、ジーモンが1920年にベルリンのエジプト博物館に寄贈したのである（Fig. 9）。

20 Vgl. Friederike Seyfried (Hrsg.): Nofretete: Was bleibt ausser Schönheit? In: Ders.: *Im Licht von Amarna. 100 Jahre Fund der Nofretete*. Petersberg: Michael Imhof Verlag 2012, S. 189-194, hier S. 192 u. 194. Athena Van der Perre: Nefretetes [vorerst] letzte dokumentierte Erwähnung. In: Seyfried, 2012, S. 195-197.

21 本稿で記したジーモンの事績全般については、以下の2つを参照した。

Olaf Matthes: Simon, Henri James. In: Die Historische Kommission bei der Bayerischen Akademie der Wissenschaften (Hrsg.): *Neue Deutsche Biographie*. Berlin: Duncker & Humblot 2010, Bd. 24, S. 436-438. Simon, James. In: Walter Killy, Rudolf Vierhaus (Hrsg.): *Deutsche biographische Enzyklopädie*. München: Saur 1998, Bd. 9, S. 332.

22 Vgl. <http://www.museumsinsel-berlin.de/masterplan/projektion-zukunft/>.

23 しかしながら、かれのジーモン兄弟社（Gebrüder Simon）は、第1次世界大戦を機に傾きはじめて、ヴァイマル共和国時代にも改善しなかった。ジーモン自身は1927年に会社から身を引くものの、1931年には倒産してしまった。Vgl. Matthes, 2010, S. 437.

すなわち、ジーモンが私財で購入したり、発掘させた膨大な量の美術品が寄贈されることによって、「博物館の島」の収蔵品は増大していったのである。19世紀末から20世紀初頭にかけて、現在の「博物館の島」の基礎を形成したのは、かれの趣味と財力であっただろう。1932年に他界したジーモンは、1933年ごろから苛烈になっていく反ユダヤ主義を直接、体験することはなかっただろうが、ナチス時代にかれの名声が失墜させられたことは想像に難くない²⁴。

そして、かの胸像をめぐるには、もうひとり重要な人物がいる。エジプト学者ルートヴィヒ・ボルヒャルト (Ludwig Borchardt, 1863-1938) である (Fig. 10)。かれこそは、1912年12月6日にネフェルティティの胸像をテル・エル・アマルナで発見した発掘現場の責任者であった。ボルヒャルトはベルリンのエジプト博物館で勤務したり、フランス人考古学者オーギュスト・マリエットが創設したカイロのエジプト考古博物館の所蔵品総目録を作成したりと²⁵、レプジウスとマリエットの系譜につらなるエジプト学者であることは興味深い。

かれの発掘日誌の1912年12月6日付記事によると、「彩色がほどこされた等身大の女王の胸像、47センチ大。上面が平たく切断された青いかつらをかぶっており、中段に[ヘア]バンドが巻かれている。[ヘアバンドは]同様に彩色済み。そのつくりはまことに傑出している。[この像の]描写は用をなさない。ひと目みればわかる」²⁶と検分している。

発掘現場で直接指導していたボルヒャルトは、ネフェルティティの胸像をエジプト政府の考古省の正式な手続きであるパルタージュ (分配) 制度にきっちりゆだねた。そこでドイツの所有が認められたのちに、ベルリンに発送した。ほかの発掘品にひと月さきがけて、1913年2月末、当時ティーアガルテン15A番地にあったジーモンの豪邸に、ネフェルティティ胸像は到着したのである。

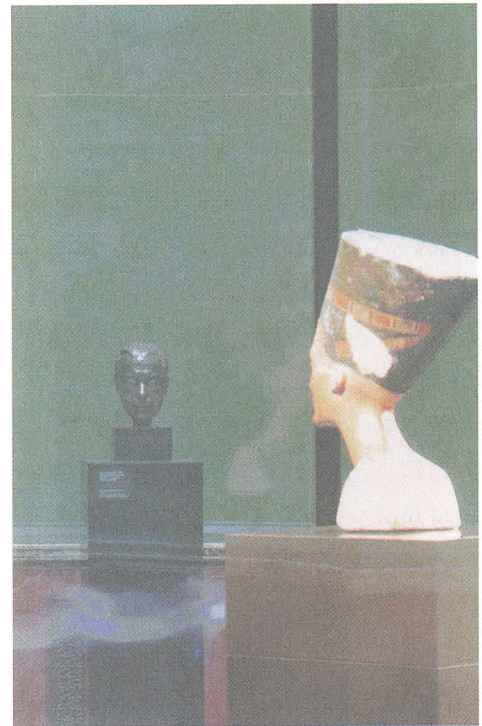


Fig. 9 現在はノイエス・ムゼウム内のネフェルティティの胸像そばに、ジーモンの頭部像が飾られている
(Dietrich Wildung: *Die vielen Gesichter der Nofretete*. Ostfildern: Hatje Cantz Verlag 2013, S. 13.)

24 たとえば、1933年以降、ベルリンの博物館群内で、ジーモンの寄贈を示す銘文や由来はすべて削除された。Vgl. http://de.wikipedia.org/wiki/James_Simon.

25 Vgl. Herbert Ricke: Borchardt. In: Die Historische Kommission bei der Bayerischen Akademie der Wissenschaften (Hrsg.): *Neue Deutsche Biographie*. Berlin: Duncker & Humblot, Bd. 2, S. 455. Borchardt, Ludwig. In: Walter Killy, Rudolf Vierhaus (Hrsg.): *Deutsche biographische Enzyklopädie*. München: Saur 1995, Bd. 2, S. 26.

ボルヒャルトは、ベルリンで建築学とエジプト学を習得し、ベルリンのエジプト博物館で1年間働いたのち、1895年からエジプトにわたり、おもに1898年から1901年までアブシール、1911年から1914年までアマルナでの発掘を主導した。そのさいに、ネフェルティティの胸像を発見している。1906年にエジプト学教授、1907年にカイロのドイツ考古学研究所の初代所長になった。Vgl. A. a. O., ebd. なお、オーギュスト・マリエットについては後述。

26 Dietrich Wildung: *Die vielen Gesichter der Nofretete*. Ostfildern: Hatje Cantz Verlag 2013, S. 15.

6 胸像の所有権のゆくえ

ボルヒャルトがネフェルティティの胸像を通過させなければならなかったパルタージュ制度とは、エジプト政府がヨーロッパの発掘国と発掘品を分配する制度である。この発掘品を管理する考古局（現在の考古最高評議会）を開設したのが、「エジプト博物館生みの親」といわれるオーギュスト・マリエット（1821-81）で、エジプトの文化財の現地保存第一主義をとえ、海外流出を厳格に管理した²⁷。ちなみに、そのかれが1858年にカイロのプーラクで設立したのが、近東で最初の考古学博物館であって、それが現在のエジプト考古学博物館となったために、「生みの親」と呼ばれている。その所蔵品の基礎となったのは、マリエット自身がメンフィスやアビドスで発掘し、博物館へ寄贈したものである²⁸。

ところで、一見すばらしい制度に思われるパルタージュ制度そのものにも、ポストコロニアルな視点からの批判が存在する。なぜなら、この考古局で古代の発掘品を管理していたのは、歴代のフランス人考古学者たちであるからだ。考古局や国立美術館が正式にエジプトの管理下に置かれるのは、ガマル・アブデル・ナセルによる革命後の1952年のことである²⁹。そして、このパルタージュ制度が、現在もネフェルティティ胸像の所有権をめぐる問題の根源であることも否定できない。

1989年から2009年までベルリン・エジプト博物館館長であったディートリヒ・ヴィルドウングの『ネフェルティティの多くの容貌』（ハトイエ・カンツ出版社、2013年）は、ネフェルティティの胸像についての詳しい解説書であって、この胸像のほか、多くの所蔵品の図版が載っており、本稿執筆にあたり益するところが多かった文献である³⁰。ところが、この著作がドイツ語とアラビア語の2カ国語表記なのは、その内容



Fig. 10 ルートヴィヒ・ボルヒャルト
(http://de.wikipedia.org/wiki/Ludwig_Borchardt)

27 川村喜一（編）、『世界の博物館 17 エジプト博物館』、講談社、1978年、7-8頁、ワックスマン、2011年、85頁参照。

28 Vgl. Mariette, Auguste Ferdinand François. In: Wolfgang Herck: *Kleines Lexikon der Aegyptologie*. 4., durchges. und überarb. Aufl. Wiesbaden: Otto Harrassowitz 1999, S. 179. Barbara S. Lesko: Mariette, François Auguste Ferdinand. In: Katharyn A. Bard (Hrsg.): *Encyclopedia of the Archaeology of Ancient Egypt*. London, New York: Routledge 1999, S. 469. ワックスマン、2011年、85、154-155頁参照。ちなみに、関西大学CHCが発掘や修復保存活動をおこなっているサッカラム、マリエットが300基の墓を発見したことで知られている。Vgl. Lesko, 1999, ebd.

29 ワックスマン、2011年、85-86頁参照。むしろ、20世紀中盤まで、エジプト人がエジプト学を学ぶことを許されてはいなかったという歴史的事実に注目すべきである。たとえば、エジプトの古代美術品の国外流出に否定的であったマリエットでさえ、エジプト人に考古学を教えることに反対で、エジプト人に考古学を教える学校を閉校したし、マリエットの後任のガストン・マスペロは、エジプト人による発掘をすべて禁止している。こうした事情の背景は、エジプト人が文化財を管理できるほど「十分に文明化していない」と述べる19世紀末にイギリス領事をつとめたクローマー卿の発言などに看取できるだろう。ワックスマン、2011年、同頁参照。

30 著者のヴィルドウング自身がエジプト博物館館長であったときに、エジプト考古最高評議会会長のザビ・ハワスとの対立があった。エジプト人の盗掘者がヴィルドウングに美術品を密売したと話すテープをもっているとして、ハワスがかれにエジプトでの発掘許可を出さなかったという。ヴィルドウング自身は否定し、起訴もされていない。ワックスマン、2011年、90頁参照。

をひもとくと、非常に政治的な理由にもとづくものであることが容易に推測されるだろう。

この胸像は現在もエジプトから返還を要求されているのだが、エジプト側は最初にドイツへ輸出する過程に問題があったと主張している³¹。そのためだろうか、胸像をエジプト国外へもち出す経緯を記した部分はとりわけデリケートな描写がなされているように思われる。

ネフェルティティ胸像の発掘後に、この胸像に関する詳細な情報と写真がベルリンに到着すると、1898年にジェームズ・ジーモンのイニシアティブによって設立されたドイツ・オリエン特協会（Deutsche Orient-Gesellschaft）では、胸像を合法的にベルリンに帰属させるための議論が白熱した。ジーモンは当時36,000マルクを支払う準備があることを表明したというが、エジプト考古局のレギュレーションに対しては、金銭的な保証の効力はまったく予想できなかったという³²。現場のボルヒャルトたちについては、以下のように記述されている。「アマルナの発掘小屋のボルヒャルトとそのチームは、ネフェルティティ胸像が1913年1月20日におこなわれる発掘品分配でドイツ人発掘者のものになるという幻想を抱きはしなかった。発掘品分配の前夜、かれらはろうそくの光のもとで荘重な列をなして、フタをするまえの輸送用荷箱におさめられたネフェルティティに別れを告げた」³³。

かれらがドイツへの胸像輸出をあきらめていたのは、ちょうどその時期に、発掘品分配のレギュレーションが変更されたからである。イギリスに支配されているエジプト政府は、「ちょうど半分」（à moitié exact）の原則にしたがって分配されなければならないという条例を公布していた。フランス人学者によって運営された遺品管理やマスペロに対してなされた措置であり、マスペロがこれまでヨーロッパ諸国の発掘品分配をとりわけヨーロッパ優位に処理してきた行為を狙い撃ちにしていた。すなわち、エジプト政府による拡張的な農業政策および入植政策によって急激に脅かされはじめた古代遺跡を決定的な破壊から保護しようとするマスペロ自身の企図が支持されるように、海外の施設に便宜をはかっていたからだとしている³⁴。ヴィルドウングによるこのあたりの記述は、当時のエジプト政府が遺跡の破壊を顧みない政策をおこなったために、エジプト側役人のマスペロでさえ、エジプト国外流出を奨励していたかのように思わせる。

いずれにせよ、1913年1月20日正午に、中央エジプト担当の古代遺産監査官ギュスターヴ・ルフェーブルがアシュートから到着し、監査官長のフランス人ガストン・マスペロの代理人として発掘品分配を実施した。ヴィルドウングによると、発掘品分配を半分ずつ分けあう新ルールを遵守しておこなわれたとしており、その正当性に関して、わざわざ注までつけて、内容を証明するオリジナル文書の複写があることにまで言及している³⁵。ボルヒャルトが作成した2種類のリストにもとづいて、ルフェーブルは写真と現物を照合した結果、エジプト側にはネフェルティティとその家族が描かれた彩色レリーフを、ドイツ側には胸像を分配した。このさい、フランス語で記された分配記録は2部が清書されて、ルフェーブルとボルヒャルトの署名がなされた。さらに同日の夜に、ボルヒャルトはマスペロに書簡を送り、このときのカイロとベルリンの

31 たとえば、2009年12月20日付のエジプト考古最高評議会によるドイツへの返還要求では、「ボルヒャルトは胸像が石灰石でできたネフェルティティ王妃の像であることを知りつつ、石ころの王女だと偽って持ち出したと指摘。また、胸像は粘土でコーティングされ、こっそりドイツに持ち出された」と主張している」。2009年12月21日付 AFPBB News、<http://www.afpbb.com/articles/-/2677093> 参照。

32 Vgl. Wildung, 2013, S. 17 f.

33 A. a. O., S. 18.

34 A. a. O., ebd.

35 Vgl. Wildung, 2013, S. 18 u. 94. ちなみに、この注で参照指示されている文献は、ヴィルドウングの後任としてエジプト博物館館長となったフリーデリケ・ザイフリートのものである。

双方に分配されたアマルナの発掘品はベルリンでの共同展示に使用できるように提案しており、マスペロはこれに同意したという³⁶。

しかしながら、ワックスマンによると、真相はわからないことになっている。ボルヒャルト自身が胸像をクリーニングせずに、泥まみれの状態でパルタージュにかけたと話していたり、エジプトの主張では、ボルヒャルトがあまり重要でない発掘品に胸像を紛れこませたという³⁷。

ともかく、ルフェーブルが胸像をチェックして、ドイツ側の所有に帰したのは、まちがいないといえる。これに対して、ボルヒャルトが石灰石のネフェルティティ胸像を石膏の王女だといつわり、粘土でコーティングし、こっそりドイツに発送したと、2009年にあらためて主張したのはザビ・ハウスである。つまり、エジプト側はいまだパルタージュが正常になされなかったとみなしているということだ³⁸。

ここまでの経緯をたどってみると、ヴィルドウングのこの著作がドイツ語とアラビア語の2カ国語で2013年に出版された理由は明白である。すなわち、ネフェルティティ胸像をめぐる当時のパルタージュが正しくおこなわれ、その結果として、ドイツがその所有権を正当に有していると、エジプト側に対しても広範に主張する意図をもっているからだといえよう。

その後もベルリン・エジプト博物館に所蔵されつづけたネフェルティティの胸像の歴史についても言及しておく、胸像は戦時中の1939年にチューリンゲンの岩塩坑へと疎開させられたが、敗戦後の1945年に米軍の遺跡美術資料部隊に没収された。1956年に旧西ドイツへ返還されたが、かつてのエジプト博物館が旧東ドイツに帰属していたので、旧東独は胸像返還を要求したため、ベルリンの壁崩壊まで40年以上、帰属についての論争は継続したのだった³⁹。

ネフェルティティの胸像に関する問題は、ドイツ特有の歴史によって少し複雑になっているかもしれない。本章で多く言及したヴィルドウングの著作『ネフェルティティの多くの容貌』冒頭3頁は、「ジェームズ・ジーモンへのオマージュ」に割かれており、「1932年に亡くなったこの人物 [ジーモン] を記念するものはナチス期になくなってしまったが、2007年になってようやく、博物館の島に隣接した小さな公園にジェームズ・ジーモンの名があたえられることになった」⁴⁰と記述されている。「博物館の島」第6番目の博物館にも、その名が冠せられたり、2006年には芸術や社会へのかれの貢献を顕栄するためのジェームズ・ジーモン財団が設立されたりしたことで⁴¹、芸術を愛し、蒐集につとめて、その多くをベルリンに寄贈したユダヤ大商人ジェームズ・ジーモンの復権は完全になされたとみるべきだが、かれの毀誉褒貶と復権の歴史からは、ドイツのユダヤ人問題の根深さをみてとれるだろう。

7 古代発掘品の所有権はどこへ

ネフェルティティ胸像の所有権をめぐる問題は現在、欧米の有名美術館の多くがかかえている。19世紀中盤まで、エジプトで発見された発掘品は、神殿の一部までが無制限に国外へともち出されていたのであって、現在の大英博物館やルーヴル美術館などに所蔵されている大多数の遺品もその時代に流出したもので

36 Vgl. a. a. O., S. 18 f.

37 ワックスマン、2011年、86-87頁参照。

38 脚注31参照。

39 ワックスマン、2011年、88頁参照。

40 Wildung, 2013, S. 12.

41 Vgl. http://de.wikipedia.org/wiki/James_Simon.

ある⁴²。無料公開しているとはいえ、大英博物館の展示品の多くも、現地の許可なく国外へ流出したもので、エジプトコレクションもナポレオンのフランス軍から押収したロゼッタ・ストーンなどを収集したのが最初であった⁴³。

ザビ・ハウスの主張に依拠すれば、ひとりボルヒャルトのみが非合法的な行為をなしたように思われるが、その真偽はべつとして、19世紀にはもっとひどい事例にことかかない。既述のとおり、シャンポリオンはヒエログリフを最初に解読した人物だが、ルーヴル美術館のエジプト美術部門の初代学芸員という肩書も有していた。ルーヴル所蔵のエジプトコレクションは1926年まで遡及できるのだが、それらの9,000点をあの時代に蒐集した人物でもある。シャンポリオン自身が晩年にエジプトを来訪し、セティ1世の墓の出土品もふくめて、102点の古美術品をもち去っている。ルーヴル美術館所蔵のエジプト関連のコレクションは「探検家」や「コレクター」が数世紀かけて、エジプトから流出させたものであるのは明らかである一方で、現在でもなお、これらの美術品の解説には、来歴や以前の所有者についてはいっさいの記載がない⁴⁴。

古代の美術品・発掘品の来歴が未公開であることと、それをとりまく問題を、ベルリンのエジプト博物館も同様に内包している。たとえば、ベルリン国立博物館発行のノイエス・ムゼウムを紹介する小冊子には、パピルスコレクションの収蔵そのものは表紙に誇らしく記述されているが、いざこのコレクションの記載を調べると、その内容や史料・美術的価値については記されているものの、どのようにして収蔵されるにいたったかなどの由来や入手経路については、いっさいの言及がないのだ⁴⁵。前述のごとく、トロイコレクションに関しては、シュリーマン寄贈の経緯がそれなりに詳細に記されているにもかかわらず、である。

その理由は、やはり来歴をおおびらに公開するのが困難であるからのようだ。イタリア北東部の港湾都市トリエステ出身の商人ジュゼッペ・パッサラクアから購入した古代美術品とパピルスのコレクションがレプジウス以前のエジプト博物館の最初期の収蔵品であったことは、本稿第2章ですでに述べた。そして、このパッサラクアという人物の発掘品入手過程があまり触れられたくない部分なのだ。

たとえば、ベルリン・エジプト博物館成立に関する専門研究書をひもとくと、同博物館の草創期に貢献した人物としてのパッサラクアの功績が記されており、その事実はゆるぎない。1832年にエジプト博物館が一般開放されると、大好評を博し、ひと月に13,000人の来場者があった。しかも、それはかれの発案による展示方法のおかげであって、アレクサンダー・フォン・フンボルトによる展示方法の変更案が提出されたものの、フリードリヒ・ヴィルヘルム3世に拒否されている⁴⁶。

イタリア語、フランス語、ドイツ語、英語を流暢に話し、ラテン語とギリシア語も原著で読めたうえに、世故にもたけていたというジュゼッペ・パッサラクアの事績を確認すると、以下のようなになる⁴⁷。もともとエジプトで馬の売買をいとなんでいたかれはこの商売が思わしくなかったために、エジプトの古美術商と

42 川村喜一、1978年、7頁参照。

43 ワックスマン、2011年、88頁参照。

44 ワックスマン、2011年、102頁参照。

45 エジプト博物館の来歴は、17世紀の選帝侯フリードリヒ3世（1657-1713）の治世まで遡及できる。1693年に選帝侯古代キャビネットの監督長に任命された古代学者L・ベルガーによって購入されたものが、ベルリンにおける最初のエジプト古美術である。Vgl. Thomas L. Gertzen: *École de Berlin und ›Goldenes Zeitalter‹ (1882-1914) der Ägyptologie als Wissenschaft. Das Lehrer-Schüler-Verhältnis von Ebers, Erman und Sethe*. Berlin, Boston: Walter de Gruyter 2013, S. 261 f.

46 Vgl. a. a. O. S. 262-266.

47 Vgl. a. a. O. S. 263.

なったが、こちらでは成功者となった。1822年から25年にかけて、パッサラクアはテーベのナイル川西部沿岸のデイル・エル・バハリで発掘をおこなった。1826年には、サッカラのピラミッドで史料価値の高い医学に関するパピルスを発見している。かれが同年にパリのギャルリ・ヴィヴィエヌで展示したコレクションは1,600点を数える⁴⁸。

興味深いのは、パッサラクアがただの発掘品商人ではなく、考古学の知識と才能にめぐまれていたらしいことだ。パリでの展示のさいに、自身の考案したコンセプトでテーマ別の展示方法を考案したり、これにもとづくカタログを作成したりしていたほか、展示品に解説を添付したり、ヒエログリフの翻訳も用いたりして、来場者になじみやすくする工夫がこらされていたようである。

このコレクションをフランスに売却することをもくろんでいたパッサラクアだが、交渉はうまくいかなかった。そのかわり、展示におとずれていたプロイセン王のフリードリヒ・ヴィルヘルム3世が買い手となって、1828年、パッサラクアが所有するエジプトコレクションの大部分を購入した。同時に、かれ自身もその管理人および部局長（のちにエジプト博物館館長）としてベルリンで雇用されたのである。37年間という長きにわたって、パッサラクアはその職をつとめあげた。かれの後任者こそがレプジウスであるが、これほどの長期間、エジプト博物館館長職をつとめた者はその後もいなかった。

19世紀ベルリンの美術シーンにおけるエジプト博物館館長としてのパッサラクアの貢献は、あえていうまでもない。しかし、かれの名がジーモンほどに語られることは少ない。おそらく、かれがイタリア人であることが理由のひとつであるだろうが、もうひとつはかれの発掘方法が現代の視点からすると、「盗掘」した古美術品を無断でもち出して売却したという行為に相当するからであろう。

ところが、この行為そのものは、19世紀前半の同時代人の視点からみれば、ごくあたりまえであったはずだ。たとえば、エジプト考古局を設立して、遺跡の破壊や発掘品の国外流出を防ごうとしたとされるオーギュスト・マリエットでさえ、1857年の発掘では、炸薬を使用して、墳墓を開口しているのである⁴⁹。パッサラクアにしても、「発掘」品とその「輸出」に対して、文化財保護やその帰属権などを意識することはまずなかったとみるべきであろう（ちなみに、ユネスコが来歴のない美術品の輸出入を全面的に禁止したのは1970年のことである⁵⁰）。

ともあれ、こうしたエジプト博物館の収蔵品の由来が、ジュゼッペ・パッサラクアのことに公式の書籍であえて触れないようにしているかのごとく看取される理由ではないだろうか。やはりパッサラクアによる発掘品の入手方法に対して、現代ではおおっぴらに公表するのが困難なのだと考えられる⁵¹。ネフェルティティの胸像をめぐる帰属権問題をむしかえす、寝た子を起すような事実については、極力言及しない方針だと推測されるだろう。

とはいえ、出土国にいっさいを返還すれば、それで問題が解決されるということになるわけではない。筆者もカイロのエジプト考古学博物館を2008年の冬におとずれたが、特定のものを除いて、ほとんどの展示物には、いっさいの解説がなく、ところせましと雑然と並べられていて、ヨーロッパ近代初期のヴンダーカーンマーのような印象であった。その保存状態については、シャロン・ワックスマンが以下のように記している。

48 Vgl. http://de.wikipedia.org/wiki/Giuseppe_Passalacqua. 本稿でのパッサラクアに関する事績の多くが同一サイトの記事に依拠していることを付記しておく。

49 Vgl. http://de.wikipedia.org/wiki/Auguste_Mariette.

50 ワックスマン、2011年、282頁参照。

51 パッサラクア以前の選帝侯古代キャビネットに収蔵されていたものも、H・C・M・フォン・ミヌトーリ（1722-1846）などの「冒険者」の「発掘品」である。Vgl. Gertzen, 2013, S. 261 f.

「所蔵品のほとんどは地下倉庫にしまわれているが、その混沌ぶりは有名であり、どこに何があるのか誰も調べたことはない。それぞれの財宝には管理人がいるが、完全な目録や、きちんとした保管体制もない。2005年に地下倉庫から3体もの彫像が盗まれて初めて、ザビ・ハウスは、目録を作成し所蔵品を整理すると宣言した。倉庫を訪れたニューヨーク・タイムズ紙のある記者が見たのは、張りめぐらされた蜘蛛の巣と、[・・・]、棚の上に放置された人間の骨、木枠の中の頭蓋骨、そして、散乱した机やお守りや椀や瓶だった。2年経った今でも、目録は完成していない。1階の展示室にいる警備員は少なく、展示品を触る客を止めようとしな。博物館前の芝生で来館者がスフィンクスにまたがって写真を撮っている、注意しない」⁵²。

エジプト考古学博物館が上記のような状態にあるにもかかわらず、ネフェルティティの胸像が返還されることに論理的正当性を主張するのは、非常に困難だといえよう。出土国の収蔵品管理能力がなければ、古代の大いなる遺産が返却されたとしても、喪失という運命をたどるだけである。しかも、エジプトにかぎって言えば、事態はもっと複雑だ。2010年12月に勃発した「アラブの春」の余波で2011年1月下旬にエジプト革命が発生したが、デモのさなかに暴徒が侵入し、ツタンカーメンやアメンホテップ4世の像など18点の収蔵品が盗まれた⁵³。しかも、革命から数年が経過しても、いまだ収束の気配はなく、今後もエジプト国内にある古美術品が混乱に乗じて狙われる可能性は決して少なくはない。

エジプトのみならず、古代の遺跡が出土される国は、内戦や欧米諸国と戦争状態にあるばあいが多いために、こうした事情を勘案すれば、欧米諸国の大博物館群における発掘品の保存維持が支持されるのも無理ないことと思われる（かれらにすれば、最高の集客力を有する目玉展示品を失ってしまうのだ）。

「エジプトに民主主義はまだ早い」とは、かつてムバーラク大統領の腹心だったスレイマーン総合諜報庁長官のことばであるが⁵⁴、同時代人のわれわれにはその真否を判断することは不可能である。しかしながら、希望がないというわけでもない。2011年1月28日金曜の礼拝後にエジプト各地でデモが拡大し、全土で38人が死亡したいわゆる「怒りの金曜日」の夜に、混乱に乗じてタハリール広場に隣接するエジプト考古学博物館に侵入をはかろうとした泥棒たちがいた。これを阻止するために、広場に集まっていたデモ隊の一部が自主的に「人間の鎖」で博物館を包囲したという⁵⁵。

文化財を盗むのがエジプト人であれば、文化財を守ろうとするのもエジプト人なのだ。目下のところ、発掘された古代芸術品の帰属権をめぐる問題は解決の糸口がみいだせないとしても、デモ隊から博物館を保護しようとする「人間の鎖」が形成されたという事実は、将来の問題解決への可能性を胚胎しているとはいえるだろう。

本研究は、「文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業（平成25年度～平成29年度）」によって行われた。

52 ワックスマン、2011年、155-156頁参照。

53 2011年2月14日付読売新聞東京版夕刊10面参照。

54 鈴木恵美、『エジプト革命 軍とムスリム同胞団、そして若者たち』、中公新書、2013年、255頁参照。

55 田原牧、『中東民主革命の真実 エジプト現地レポート』、集英社新書、2011年、103頁参照。